

---

# 新月のご招待

すももっち

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

新月のご招待

### 【Nコード】

N7682J

### 【作者名】

すももっち

### 【あらすじ】

新月の夜、椿はダスティニー二国へと召喚され、四人の内の誰か一人と契りを結ばなければ日本に帰れないと宣言された。しかし第一候補の男は見目麗しいが中身は腹黒？不良高校生椿は日本に帰れるのでしょうか。ただいまパーティー編に突入しました。

## 黒姫召喚 1

新月の夜。

月が隠れるその夜に、神様に内緒でお呼ばれされるの。

黒い日に黒い娘。

さあ見つけてごらん。

それが君の

“運命の人”

古くからこの国に伝わる詩。

成し遂げるのは王家の男。

さて、次期国王の黒い娘は誰であろうか…。

○○\*○○

なんだここは…。

驚きよりも先に怒りが溢れたのは、果たして性格のためであろうか。  
椿はぐるりとあたりを見回す。

薄暗い教室ほどの広さの部屋で、四隅にはロウソクが立っている。

そのロウソクは今にも消えそうな短さだった。

胡散臭い占いの館のようだと椿は思った。

しかしその胡散臭い部屋の中心に制服姿で地べたに座っているのが  
自分だと思つと、なんとも言えない気持ちになる。

冷静にあたりの分析ができるほど椿は大人しい性格ではない。

目の前の、それこそ占い師のような格好をした人物をとりあえず睨

み付ける。

男だか女だか子供か大人か、なんの情報も読み取れないほどすつぱりと黒い布で全身を覆い、更には顔までその布で隠している。やはり訳が分からないので胸ぐらを掴むのはやめておいた。

「…なんだよいたい」

全ての事柄が疑問なため、全ての事柄に対しての疑問として口にした。

その低い椿の言葉に、目の前の黒い布の人物はぴくつと反応した。戸惑わしげに顔を上げたその黒い布の人物と椿は目を合わせる。そして目を合わせると同時に、お互いが目を丸くした。

（お、女の子じゃん…）

薄暗く、しかも光はロウソクの灯りだけなため、はっきりとはその人物の風貌は分からない。

しかし整っているのだろことは椿にも理解できた。ロウソクのせいかもしれないが、瞳が赤く見える。

（外人？つかどこの国が赤い目なの…？）

椿の頭では見当もつかない。

しかし最近ではカラーコンタクトという画期的な物も販売されている。

占い師もそんな小細工をしなければいけないほど不景気なのか…と、少しズレた感想を持った。

「茶色の髪…？」

占い師（仮）が椿を見ての第一声がそれだった。

椿が小さくすつとんきょうな声を上げたのは言うまでもない。

椿は肩よりも少し長めの髪をブラウンに染めていた。

椿はまだ高校生であるため教師陣には散々注意を受けているが、本人はどこ吹く風。

何度言われようと髪を黒に戻す気はこれっぽっちもなかった。

それどころか次はもつと明るくしようと思っていたほどである。

それよりも、この占い師の女の子がブラウンの髪に驚くことが椿は不思議だった。

今どきは普通なことなのに。

椿がきよとした表情で占い師の女の子を見返すと、その女の子はぶんぶんと首を横に振った。

「無事、新月の召喚が完了致しました。ご報告をお願いします」

か細く綺麗な声だった。

その声が淡々と言葉を告げている。

そこでやっと椿は占い師の女の子の背後に数人の人物が立っていることに気付いた。

この人物たちもこの占い師と同じように黒い布で全身を覆っている。その1人が短く返事をしたかと思うと、近くの扉から部屋を出ていった。

一瞬だけ開いた扉から、キラキラと光の筋が入り込む。

その眩しさに椿は目を細めた。

この部屋が暗いからかもしれないが、その光が椿の目にはとても綺麗に映った。

この部屋から外に出たい。

そんな衝動が椿を襲った。

しかし今はこの占い師と対峙している手前、その衝動を抑えることにする。

（とは思ったものの…）

何か話せばいいのに、この占い師はさっき以来口を開こうとしない。  
椿の最初の質問は完全無視。  
椿がそれに癪癪を起こさない訳がなくて。

「あんた誰？ここどこ？」

冷静さを取り戻しつつ椿は目の前の占い師に問い掛ける。  
冷静さを取り戻しつつあると言っても、口調はツンツンと厳しいものとなっているが。

その椿の言葉に占い師は怯んだように見えたが、やはり口は開かなかった。

彼女にとって今椿と言葉を交わすのは御法度とされている。  
どんなに恐怖を煽られたとしても、言葉を返すなど持ったの他なのだ。

しかし椿がそれを知るはずもない。  
椿のイライラは徐々に増していく。

「なんとか言いなさいよ」

自然と命令形になっている。

それでも占い師はうんともすんとも言わない。

「言えっつーの」

「……………」

「おい」

「……………」

そろそろ椿の堪忍袋の尾も切れるというもので。

頭の中で何かがプーンと音をたてて切れ、血液が逆流するを感じた。

どしんと音を響かせながら立ち上がり、床にそのまま座っていた占い師を上から見下ろした。

その占い師は呆気にとられたように椿を見上げ返す。

「いい加減にしろっ！」

思ったよりもその声は部屋にこだまする。

占い師の背後の黒集団も動揺しているのが椿にも感じ取れた。

しかしそんなのは構わない。

もともと目立つのはキライな訳じゃない椿にとって、悪目立ちだとしても別段気にすることは何もない。

「ここはどこで何！あんたらは誰だ！なんであたしはここにいるんだよ！」

力の限り叫んだため、言い終えた後の椿はあはあと荒い息を繰り返した。

占い師はぽかーんと口を開けて椿を見つめ続けている。

その表情だけで椿の怒りはするすると終息した。

（ダメだこの子…。ケンカ慣れしてないわ…）

いつもの椿の周りの奴らならばすぐに怒号が返ってくる。

しかしそれはそういう雰囲気で育ったからであって、それに端正がなければそうはいかない。

良い例がこの目の前の占い師だ。

この占い師にいくら怒鳴ったとしても、きつと泣き出すのがオチだ

ろうと椿は思った。

椿だって男勝りだなんだと言われてもやはり女の子。  
泣かしたい訳ではなかった。

「他に誰かいらないわけ？」

その占い師の横を通り過ぎて扉へと真っ直ぐ足を向けた椿に、さすがに占い師も焦ったのだろう口を開いた。

「お、お待ちくださいませっ、黒姫様！」

（くろひめさまあ？）

椿が振り返って占い師を見つめると、罰が悪そうな顔をされた。

やってはいけないことをやってしまった！というように、その顔から徐々に血の気が引いていく。

若干の申し訳なさが込み上げるがしかし、椿にはなぜ罰が悪いのか分からない。

「何？」

と聞いたところでやはり話さない。

更に椿を逆撫でするとも知らずにやっているのだとしたら、それはかなり質が悪い。

ムキーとなった椿はもう止められなかった。

またドシドシと歩みを始めた椿に占い師が尚も同じように呼び止めるが、次は止まるのをやめた。

一言でいえば「めんどくさい」。

扉付近に控えていた黒の集団もおたおたするばかりで、椿を止めようと手を伸ばす者はいない。

止めたいのに、だ。



それをいいことに椿はパンツとけたたましい音をたてながら扉を開けた。

あまりの眩しさに椿は目を閉じる。

光だ。

白い光。

昼間の太陽という、そんな光ではなかった。

（真っ白い光…？）

椿は少しづつ目を開けていった。

完全に目を開いたところで、椿は呆然とした。

（な、なんだ…？）

城か、豪邸か。

どちらにしても椿とは縁がない建築物である。

しかし現在自分はそう呼ばれるであろう場所にいると思われる。

右を見ても左を見ても正面を見ても、豪華豪華豪華…。

赤いどこまでも長く続く絨毯。

キラキラと光を吸い込んだような窓枠。

白光りしている壁には中世のような絵画。

ゴッホが書いたと言われても、椿は納得しただろう。

廊下、なのだろう。

椿の中の廊下の概念とは程遠いが。

「あなたは…」

声に振り向くと、男が目を見開いた状態で立ちすくんで椿を見ていた。

その男を見て、椿は息をつまらせた。

（こんなのアリ…？）

男の人には言うべきかは分からないが、その男は間違いなく美人だった。

女性らしい訳ではない。

顔のつくりとか、その身のこなしとか、その人の持つオーラとか。何もかもが美しい。

（ああ、髪 of せいかも）

男の背に流れる髪は椿よりも長い。

腰ほどまでのクセのない髪は少しの風でもサラサラとなびいた。

そして目を引いたのはその色だ。

椿には見慣れない銀色の髪だった。

（こんな綺麗な人間アリなわけ…？）

アリとか無しの話ではないのだが、椿は頭の中でそんな自問自答を繰り返した。

またその男性の服装がシミ一つなく白く輝いてるものだから、自分がこんな紺の制服を着ていることが恥ずかしくなった。

地元じゃ可愛いと評判の制服なのだが…。

しかも髪は毛先があちこち自由に遊びまくっているの、そのストレートの髪が羨ましく感じる。

（ただロン毛の男性はいかなものかねえ…）

その男性に対する椿の最終的な感想はそれで締め括られた。

「あなたが僕の黒姫ですね」

そう言っただけで微笑むその男性。

ドキリと胸が音をたてたのは致し方ない。

「エルザイ又様っ…！」

椿の背後からの焦ったような声は、占い師の女の子のものだった。

椿がそちらに目を向けると、占い師は今にも泣きそうな顔で綺麗な男性を見つめていた。

すぐるように、しがみつくようなその目。

椿はあまり好きじゃない目だった。

「言い訳はいらないよ、リーナ。後で僕の職務室に来なさい」

美しいだけに威圧感はバツチリだった。

椿に向けられた訳でもないのに、思わず椿まで竦んでしまう。

一見微笑んでいるだけにしか見えないが、オーラは確実にどす黒い。いったいこの占い師がこの人の何に不興を買ったのかと占い師を覗き込むと、今にも倒れそうなほどに真っ青で、小刻みに震えているようだった。

「だ、大丈夫…？」

それは椿でさえも心配になってしまふほどに。

椿にそう声を掛けられた占い師は、これでもかと言うほどに目を丸くしたため、椿は首を傾げることになった。

心配するというのは、これほどまでに驚かれることなのだろうか？

「黒姫、あなたは僕と契りを結ぶまでは他の誰とも会話すること

「ができないのですよ」

「は？」

「契り？ 結ぶ？」

椿には全く理解できない言葉の羅列。

今度は不審げな様子でその男性を見つめた。

椿とはまだ会ったばかりなのだが、この可愛い占い師をここまで追いつめる言葉に、あまり良い感情は抱けなかった。

そんなこともあり、見つめるといっても睨み付けるようになっていた。

「まだ何も理解できないでしょう。ゆっくりご説明いたします」

しかしそんな椿を何も気にした様子もなく、微笑みのまま男性は椿の背中に手を添えた。  
背中がゾクリとした。

## 黒姫召喚 1（後書き）

少しでも楽しんでいただけたら幸いです。

きつとのろまな投稿になると思いますが、気長に楽しんでくださいませ。

ご意見・ご感想気軽にお願いします。

最後まで読んでいただきありがとうございました。

## 2（前書き）

年齢制限はありませんが、ほんの少しだけ言葉が出てきます。悪しからず。

銀髪の青年は椿にエルザイヌとだけ名乗った。

あの占い師に見せたどす黒いオーラはいつの間にもやっ消えていて、今は美しいだけのオーラが溢れ出している。

エルザイヌは後ろに数人の男を引き連れながら椿を誘導した。

（ベルバラに出てきそうなお城…）

椿は恥ずかしげもなくきょろきょろと辺りを見回した。

確実に先ほどまでいたカラオケボックスとは空間が違う。

いつもの女子3人メンバーでいつものように遊ぶ予定だったのだ。

しかも今日は大学生の男が来ると期待して。

別に男漁りをしたい訳ではなく、椿の場合はタダで遊べるという期待なのだが。

そう考えると終息してきた怒りがまた沸々と湧いてきた。

せっかくのチャンスが丸潰れである。

「早く帰して」

説明しますと言われて誘導されているにも関わらず、その誘導の時点で焦れている椿は、相当の癪癢持ちだ。

しかしやはりエルザイヌは気にした様子はちらりとも見せない。

「部屋はもうすぐですから」

「意味わかんない。帰るだけに説明なんかいらないでしょ」

ツンツンした椿の言葉の後に、背中に添えられた手に強く押された感じがした。

椿は怪訝そうな顔でエルザイヌを見上げる。

並んでみると意外と身長差がある。

椿は女性では一般的な高さなので、エルザイヌが高いらしい。

椿の頭がやっとエルザイヌの肩に届く程度しかない。

線の細い印象を受ける見た目だけに、やはりそれは意外だった。

「ご説明、させていただきますか？」

椿がそれに恐れを感じ、恐れを感じたことが不快だった。

先のようなどす黒いオーラ。

こつも近距離で真っ直ぐ向けられるとさすがの椿もぐうの根も出ない。

それでも少しでも反抗したくて、椿は小さく舌打ちをするだけにとどめた。

その時のエルザイヌの眉がぴくりと反応したことを椿は知らない。

○○＊○○

無駄に広く豪華なその部屋には、銀色のテーブルを挟んだ向かい合  
わせのクリーム色のソファート、その向こう側の大きな机がある。

部屋の隅にはぎっしりと詰まった本棚があるだけで、無駄な家具は  
一切ない。

社長室を西洋風に広くした感じた。

大きな窓が2つ、陽当たりはとてもいいらしい。

「ここは僕の職務室です」

エルザイヌは椿にソファアーに座るよう促した。



特に断る理由もないので素直に座ったが、椿の内心は反抗心でいっぱいだった。

先ほどのこともあってか、エルザイヌに敵対心を抱いている。

エルザイヌに金魚のフンの如くついて回った男たちは、1人の大男を除いて部屋には入ってこなかった。

彫りが深く陽に焼けた浅黒い肌が男らしさを示しており、エルザイヌとは違いどこまでも無表情だ。

椿がぼすんと音をたててソファーに沈むと、それを確認してからエルザイヌは椿の向かいのソファーに腰を下ろした。

大男は扉の前で立っている。

「あなたのお名前は？」

「なんで答えなきゃなんないの」

エルザイヌとは決して目を合わさずに椿は言った。

ここがどこかはこの際もうどうでもいい。

早く帰してほしい。

「話が進みません」

柔らかそうで、その実空気は張り詰めていた。

意外とエルザイヌは短気なようだと椿は思った。

「進めれば？」

まるで他人事のように椿は吐き捨てた。

先ほどのように負けたくなかった。

この優男に、この自分が負けるものかと、意地にも似たようなものが椿の中に芽生えている。

ケン力をすれば口では絶対に負けなかった。

それをこんな訳の分からない場所で訳の分からない人物に崩された  
くはない。

「どうやら長い説明は不要のようですね」

エルザイヌもさすがにキレたらしい。

言葉こそ丁寧だが、棒読みというのは否めなかった。

それでも椿は目を合わせない。

それどころか偉そうに腕組みをする始末である。

「あなたはこの国の“黒姫”として倭国から召喚されました。そして黒姫にはこの国の次期国王と契りを結んでいただきます。つまりその人とやるってことですね」

エルザイヌの説明はかなりぶっ飛ばしたものである。

それは扉の前にいた大男が気づき、小さくため息をしたのは椿の知らぬところだ。

しかし椿が耳を疑いたかったのはある単語だけ。

黒姫とか意味は分からないが、それは後でもいい。

倭国というのも、まあいいだろう。

「やる…？」

意味が分からないのではない。

自分が想像しているものが当たっているのならば、それは相当に凄  
いことを言われたのだと思う。

むしろ当たっていて欲しくない。

「分かりませんか？いろいろな言い方はありますけど…、性行為…」  
「わかってるわ、バカ！」

椿は顔を真っ赤にしながら叫んでいた。  
そんな言葉聞きたくはなかったし、当たっていたことにも愕然とする。

その反応から椿は初なのだろうということが容易に理解できた。  
しかし椿の最後の余分がエルザイヌの不興を買ってしまっていた。  
恥ずかしそうに顔を真っ赤に染めている椿は未だ気付いていないが、  
エルザイヌの顔からはすっかり笑顔は欠如し、頬がびくびくと痙攣している。

「バカ…？」

底冷えするようなエルザイヌの声に、椿はやっと顔をエルザイヌへと向けた。

その顔はまだまだ赤い。

「俺に向かってバカ？」

（お、俺…？）

さっきまでは確かに一人称は僕だった。

椿の周りには自分のことを僕と呼ぶ人はいなかったが、エルザイヌにはそれも似合っていたからなんとも思わなかった。

しかし今は俺と言った。

それが違和感がないようなエルザイヌの表情なものだから、椿はぽかーんとしてエルザイヌの顔を凝視していた。

「俺に向かってバカとはどういう要件だろうね？俺にバカと言える  
ということは、君は相当に自分のことを評価していることになるが」  
「は…？」

さすがの椿もすぐには反論できなかった。

大した意味を持って言った訳ではなかったのだ、エルザイヌがここまで怒りを表すとは思っていなかったのだ。

（怒ってる、んだよね…）

普通の人間とは怒り方がいまいち違うようだが。

「黒姫といえども、君の俺に対する態度は考えようだな。そもそも君は本当に黒姫なのか？瞳は良いにしても髪が…」

と疑わしそくにエルザイヌは椿を見据える。

言われ放題は癪だ。

そろそろ椿の頭にも血が昇る。

「ブラウンの何が悪いだよ！今どき染めるなんて常識でしょ！？」

「常識？自分の髪を染めることが常識？」

心底信じられないといった風にエルザイヌは顔を渋くした。

椿としては当然のことを言っただけなので、そのエルザイヌの反応に戸惑いを隠せなかった。

もともと感情を隠すことはしない質なので不思議はない。

「自分の髪を染めて痛め付けて、そのどこが常識だと思うのか理解に苦しむね」

確かに何度も染めている椿の髪は、毛先をはじめ痛んでいるといえる。

椿の場合染めるだけにとどまらず、巻いたりアイロンを掛けたりしているのだから余計だろう。

しかしそんなあからさまな嫌悪を向けられると、正しいことを言われても反発したくなる訳で…。

「自分のものさしで人を測るんじゃないよ」

怒ると口調は悪くなる。

椿自身自覚症状はあるのだが、直そうと思ったことは一度もない。ケンカした時はその方が相手への牽制になる。

まあそれだけでケンカに勝てたら苦労はない訳だが。

「その口の悪さも常識か？そうだとしたら君の世界の常識はどこか間違っているのでは？」

バカにしたように鼻を鳴らしたエルザイヌを、理性がなければグーで殴るところだった。

先の柔らかい笑みはどこに行ってしまったのか。

このままこの意味不明な言い合いを続けてしまえば、椿の理性は簡単に崩れてしまうだろう。

それをさせなかったのが、新たな人物が登場したからだだった。

ノックもないエルザイヌの職務室の訪問者は、エルザイヌ同様、銀髪の子供らしい人物だった。

ただその髪は肩先の短めである。

「黒姫様は！？」

明るい声と共に部屋へと侵入しようとした少年は、扉の前に立っていた大男にぶつかった。

大層な身長差で、下手すればその少年は大男の腰までしかないんじゃないだろうかと椿は感じた。

そこまではいかずとも、しかし少年は大男の腹筋に顔をぶつけてい

る。

「…スロー、何してるんだ」

エルザイヌはため息混じりに言葉を落とした。

どうやら呆れているらしい。

少年は「ごめん、ゼーレ」と小さく言葉を漏らして、エルザイヌへと顔を向けた。

そしてちろりと舌を出した。

「失敗失敗。黒姫様に恥ずかしいとこ見せちゃいましたね」

椿の胸がきゅーんとした。

（か、かわいい…！）

弟か、あるいは小動物のようだと椿は思った。

その少年の愛らしさに保護欲をくすぐられる。

さっきまでのエルザイヌへの怒りはいつの間にか、少年への興味にすり代わった。

この少年になら黒姫と呼ばれるのも悪くない。

少年はエルザイヌから椿へと視線を向け、にこりと笑った。

まだ男になりきらない、少年のあどけなさを残した笑顔が更に椿を高揚させる。

「はじめまして、黒姫様。僕はスローレットと申します。スローって呼んでくださいね」

もちろん呼びますとも！と、心の中で親指を持ち上げる。  
こつも愛らしいと自分の今の状況も忘れてしまいそうだ。

「控えなさいスローレット。今の状況が分からないほど愚かではないだろう?」

冷めたエルザイヌの言葉は、真っ直ぐにスローレットを射ぬく。  
どす黒いオーラとまではいかないが、有無を言わさぬ威圧感をもっていた。

せっかく椿の中に芽生えた光さえもエルザイヌは振り払おうとする。  
また椿の腹の虫が暴れ出しそうだ。

「冷たいヤツ」

部屋の空気は突然零下まで降下した。

○○\*○○

エルザイヌは深い深いため息を、今日の、しかもこの一時間程度で  
何度したか分からない。

それもこれも大切に崇めなければならぬ黒姫のせいなのだから、  
ため息も二倍となってしまふ。

(なんなんだ、あの黒姫は…)

姫と呼べる代物ではない。

それは確実だとエルザイヌは思った。

不細工ではないが、特別綺麗だったり可愛らしい顔立ちでもない。  
あれを月並みの顔というのだろう。

口調は男か、いや、悪く言って賊のようである。

あれを崇めろというのは無理がある。

選ばれてしまったのだから仕方ないとしても、あれを召喚した新人の預言者を疑わずにはいられない。

（ああ、新人預言者リーナ…）

彼女もまたエルザイヌの悩みの種の1つである。

預言者になってそろそろ1年になるというのに、いつもオドオドして、その威厳さえ感じられない。

力がない訳でもないのに、だ。

また実年齢よりも幼い顔立ちのせいか、余計に部下になめられやすい。

そのせいでいつまでたっても新人である。

しかし彼女がいくら新人だといっても、あの黒姫を召喚したのはどんな預言者でも同じなのだろう。

だから彼女に怒りを向けるのはお門違いな訳だが、いかんせん、思わずにはいられなかった。

コンコン

控え目に小さなノック音の後、やはり小さく弱々しい女性の声がした。

また彼女の良からぬ噂が流れるかもしれないが、そんなのはエルザイヌの知ったことではない。

自分のやった不始末だ。

エルザイヌはふうと一呼吸おいてから扉の向こうに冷たい返事をした。



## 2（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございました。

「うそでしょ!？」

椿は部屋中に響かせんばかりに声を張った。

目の前の少年は尚もくりくりとした目で椿を見つめるだけで、特に撤回する素振りも見せない。

つまりそれは先の言葉を肯定していることになる。

「うそじゃないよ。あの人は正真正銘、僕の実の兄様」

確かに2人とも綺麗な顔立ちだと思うし、髪色も質も瞳の色も同じ銀ではある。

しかし。

「似てない…。ぜんっぜん似てない!」

綺麗というだけで、パーツは似ていない。

目だけとっていえば、エルザイヌは切れ長だがスローレットは丸いくりくりの目である。

最初の内であれば性格は似てると言えたかもしれないが、今となつてはともじやないがそんなことは言えない。

椿のエルザイヌの印象は最悪だ。

それはお互い様な訳だが、あんな理屈っぽくて冷たい人間は、今まで椿の周りにはいなかった人種である。

それ比べてこの少年スローレットは、純粹無垢、素直、そして愛らしい。

どうしようもなく甘やかしたくなる。

これが兄弟だというのだから神秘だ。  
まだ会ったばかりの兄弟に対し、椿はすでにそんな結論をつけていた。

「そんなに似てないかなあ？」

「うん。これっぽっちも」

思わず即答である。

それにスローレットはくすくすと笑みを漏らした。

あのエルザイヌはこんな笑い方はしなかったはずだ。

きっと今までもこれからもしないだろうと椿は思った。  
というより見たくもない。

「エルザ兄様になんか言われたの？」

スローレットの問いに椿は顔を渋くした。

あんな爆弾発言をみすみす放っておけるほど椿の器は大きくない。

そのせいで説明もほとんど受けないままあの部屋を出てきてしまっていた。

あの扉の前の大男は「黒姫」と声を上げたが、当のエルザイヌはど  
うぞと言わんばかりに椿を無視した。

1人あわてていたのがスローレットで、部屋を出ていく椿の後を追  
い掛けてきた。

そして「ならこっちに」というスローレットの誘導でこの部屋まで  
行き着いたのだ。

なんでも黒姫もとい椿のために用意された部屋らしく、エルザイヌ  
の職務室とはガラツと雰囲気の違い部屋だった。

白を基調にされた部屋は広く、ダブルベッドには天窓つき。

ホテルのスウィートルームなんかはこんなのだろうと椿は思った。  
庶民派な椿にしたら居心地が悪い。

しかし他にどこに行けばいいのかも分からないので、大人しくその部屋の白いソファ―に沈んでいるのだ。

「エルザ兄様からあんまり聞いてないみたいだから、僕が説明するね」

この部屋に着いてしばらく、スローレットと椿は大分打ち解けていた。

それはこのスローレットが打ち解けやすい雰囲気を持っていたことと、椿のスローレットに対する警戒心がないからであった。

そのせいでエルザイヌの時は突っぱねていた椿も、今回は黙ってスローレットの次に続く言葉を待った。

「ここはダスティニー二国。そこそこな大国だよ」

「ダスティニー二…？」

聞いたこともなければ見たこともない。

高校で地理を選択していないからかもしれないが、大国であれば聞いたことぐらいはありそうなものだが。

あいにくテレビでもその言葉を耳にしたことはない。

「椿の国は倭国って言うんだよね？その国の人は黒い髪に黒い瞳を持ってる」

「まあ、一般的には…」

正確には日本だけ…。

言葉にすることなく心の中だけで椿は訂正した。

昔は日本のことを倭国と呼んでいたらしいし、大きな違いはないのだろう。

それよりも…。

椿が引つ掛かるのは黒い髪黒い瞳の方である。

この短時間で何度言われたか知れないその単語たちは、椿からしてみれば当たり前前の話だ。

そんなにこり押しされても…、てな感じである。

「それが？」

「うん。この国にはね、黒い髪と黒い瞳の両方を持つ人はいないんだよ。そのどちらかでも極めて稀だしね。黒い髪か瞳を持つ人は“閻神様に愛されてる”って言うんだ」

「やみがみさま…」

椿としてはまいちピンとこない単語である。

しかしスローレットはそれを承知のことのようで、にこりと微笑んだ。

どこまでも可愛いそれに、そんな嘘みたいな話も少しばかり信じてしまう。

「現在の国王の時も倭国の人を召喚して、契りを結んでから国王に即位したんだよ」

（でた！契りを結ぶ！）

この愛らしいスローレットからはあまり聞きたくない単語である。無理とは分かっているが、スローレットにはいつまでも子供らしくいて欲しいと椿は思った。もちろん自分のために。

「その人、今どこにいるの？」

同じ日本から来たのならば、説明を受けるならその方が断然話は早いだろうと椿は判断した。

しかしスローレットは可愛らしく「うーん」と唸りながらあさつての方向を向いた。

「早く結婚したいって言ってたから、今ごろ旦那さん見つけて子供でも育ててるんじゃないかなあ」

「は？」

椿の想像とはあまりにかけ離れた返答に、目が丸くなる。

てつきりこの城に在住していると思ったのだ。

しかしスローレットの話ではこの城にはいないだろう雰囲気を感じられる。

追い出したのか？

それとも案外簡単に帰れるのだろうか？

「ああ、呼んだんだから帰せるに決まってるじゃん」

と当たり前のように椿は声を上げた。

簡単なことじゃないか。

自分にはできないから帰してくれと、ただそう頼めばいいのだ。

そもそも世界から見たら小さいかもしれないが、日本にだってかなりの人口がいるのだ。

その中から女性の、しかも自分と同じほどの年齢を抜粋したとしても、それは結構な数字になる。

どんだけの確率だったのか、今さら椿は呆れにも似た感情を示した。こうなれば自分の運のなさを呪うしかない。

「椿を倭国に帰そうと思えば帰せるけど、それは契りを結んだ後じゃないとダメだよ」

「な、なんで！？あつちには黒髪に黒い瞳なんてごろいんじゃん！別にあたし以外だって構わないでしょ？なんならそーゆーこと

に頓着しない子紹介するし！」

「黒姫が適当に選ばれてたんだったら、そうしたいんだけど…。どうもそうじゃないみたいなんだよね」

どこかすまなそうにスローレットは言った。

しかしその返答は椿にショックを与えるには申し分ない言葉である。つまりそれは椿にしかできないことで、椿の代わりは誰にもできないということだ。

しばらく反論もできないほどにはショックだった。

そんな椿の様子を伺いつつも、スローレットは話を続けた。

「契りを結ばなきゃ国王には即位できないから、この国にはどうしても黒姫を召喚しなきゃいけないんだ。それで、たぶん相手はエルザ兄様だと思うよ、今のところ…」

今のところ、というスローレットの言葉に椿はふと顔をそちらに向ける。

一番最初に会った時に「僕の黒姫」と言われた記憶は薄々残っているの、相手がエルザイヌというのには特に驚くことはなかった。

しかし今のスローレットの言葉はひどくあいまいだ。

そんな表情を椿がしていたのだろう、スローレットは苦笑して頷いた。

「実は今回はちょっと特殊で…。国王候補が4人いるんだよ。一番その座に近いのはエルザ兄様、その次は僕、そして叔父のシェンリルと、いとこのダツチェス。本当なら黒姫召喚までに決定されてるはずだったんだけど、今回は本当に異例なことだから…。決まらなかったんだ、最後まで。だからいつそのこと黒姫に決めてもらうと…」

「待て待て待て待て」

そこで思わず椿は制止の声を上げてしまっていた。

話は驚くべき方向へと向かってしまっている。

いったいどこをどう考えたら女子高生に国王を選ばせようという答えにいきつくのか、椿には皆目見当もつかない。

国王といえば国の最上の地位というのは、日本人の椿にでも分かる。そう簡単に決められる話ではないのではないのか？

それが国の命運を決めるのではないのか？

それとも国王とは椿の概念とは違い、ただのお飾りなのかもしれない。

だとするとそこまで悩まなくても良い気がしてきた。

だからと言って見ず知らずの男に体を許す気には少しもなれない。

なぜ国王候補が絞れなかったのかと椿の好奇心をくすぐったが、あえて問いただすのはやめておいた。

「…こつちの事情はよくわかんないけど、でもあたしにだって事情はあるんだからね」

「うん」

「だから、その…、見ず知らずの他人とそーゆーことはできない」

恥ずかしくて言葉こそ濁した椿だが、スローレットにはそれだけで伝わったらしい。

スローレットは少し寂しそうな笑顔で小さくうつむいた。

「…そうだよね。突然召喚されたんだもんね。ごめんね…」

そう素直に謝られても、椿としては困ってしまう。

かわいそうで責めることもできない。

エルザイヌであればズバズバと不平不満も言えたのだが。

それはエルザイヌが少しも悪怯れた様子を感じさせないからだ。



（感じさせないっていうより、微塵もなかったんだろうけど）

あの皮肉な笑みを見せた美形の顔を思い出すだけで、椿の腹の虫が疼きだすのだった。

### 3 (後書き)

スローレットめっちゃめっちゃ書きやすいです。

なんでしょうね、この可愛らしいいいじらしい青年は！

最後まで読んでいただきありがとうございました。

叔父のシェンリルといとこのダッチェスを引きつれて、エルザイヌは黒姫の部屋へと向かっていた。

一応この2人も国王候補。

黒姫に会わせない、という訳にはいかない。

私事を挟んだ本心を言えば、この上なく会いたくないし会わせたくない人物たちである。

こんな立ち位置だからかもしれないが、この2人とは反りが合わない。

特に叔父のシェンリルは尚更だった。

プライドばかりが高く、そのくせ周りの貴族の傀儡人形の如く使われているのにも気付かない。

哀れな男だ。

変わっていとこのダッチェスには大して言いたいことはない。

立场上相容れぬ仲になってしまったが、小さい頃は一緒に遊びすらした仲なのだ。

その内落ち着いて話したいと考えているが、そんな時間もとれないのが今の現状である。

というより、今はこれ以上問題を抱えたくないというのがエルザイヌの考えだった。

もしあの黒姫がこの2人のどちらかを気に入りでもしたら…。

そう考えると気も重くなる。

出来ることなら今すぐ回れ右をしたいのだが、そうもいかないのが今のエルザイヌの立場だ。

まだ弱いこの権力。

このままではダメなのだ。

強く、もっと強くならなければ。

（まだその期ではないが）

エルザイヌの心境は冷静であり、表面的な顔は笑顔そのもの。こんな特技を気付いた時から身に付けていた。

素直という言葉など、当の昔に置いてきてしまったようだ。

しかしそれをいとも簡単に崩されてしまったのがつい昨日のこと。普段向けられることのない暴言に、思わず怒りで返していた。

黒姫にも関わらず相当なことを言った自覚がある。

冷静に戻った今だからこそ思うことなのだから、昨日はどれだけ頭に血が昇っていたのだろう。

（ある意味才能か）

人を、更には自分をあそこまで怒らせることができるということは、褒める訳ではないが凄いことには変わりはない。

興味がある。

あんな人間が自分と出会うのは最初で最後だろうから。

「何か、聞こえないか…？」

いとこのダツチェスの声に、僅かに背後を振り返る。

剣技にそれなりの心得のあるダツチェスなので、常に五感を研ぎ澄ましているところがある。

その彼が言うのだから間違いないだろうと思い、エルザイヌも耳を澄ましてみた。

またダツチェスの表情が少なからず穏やかだったので、そう大したことでもないのだろう。

歩みを止めこそしなかったが、よくよく耳を澄ませば何かが聞こえてきた。

なんとも表現し難い“何か”。

人の声なのだろうが、それはもしかしたら歌を唄っているのかもしれない。

馴染みのない、それどころか聞いたこともないようなメロディのそれを、エルザイヌが歌だと認識するのはかなりの時間を要した。

またその声は近付けば近付くほど大きくなるものだから、嫌でもその発信源が分かってしまった。

目的地の部屋の扉は大っぴらに開いている。

恐らく空気の入れ替えをしているのだろう。

扉の外に立つ2人の衛兵がエルザイヌたちに小さく会釈をした。

部屋には先日召喚されたばかりの黒姫と、年の割に幼いままの血を分けた弟、そして預言者リーナがいる。

3人ともまだこちらに気付いた様子を見せていない。

「倭国の音楽つて、こつちとは全然違うんだね…」

「そう？それでもおとなしめのしっとりしたやつなんだけど…。童謡とかの方が馴染むかも」

そしてまた黒姫は唄いだした。

上手くもなければ下手でもない、やはり月並みである。

ただ不快ではなかった。

今まで聞いたこともない馴染みのないメロディであるのだが、悪くはない。

「亀の話の歌？」

「そう。教えてあげよっか？あっちじゃ結構、有名なお話」

「うん、聞きたい」

そう言つてスローレットは目を輝かせる。

もう当の昔に成人の義を済ませたにも関わらず、スローレットからは青臭さは未だ抜け切らない。

自分が国王となったらスローレットに任せたいことが今よりもっと山積みになるだろう。

しかしこのままでは不安で任せられないではないか。

そうなれば切り捨てるのみだが、心の置ける人物は1人でも多い方がいい。

「あつ……」

やっとエルザイ又たちの存在に気付いたのは、話にまったく参加していなかった預言者リーナだった。

その声に話に夢中になっていた2人はリーナを振り返り、その視線を辿ってエルザイ又たちを見つめた。

「エルザ兄様！」

いらしたんですか、とスローレットが声を上げると、エルザイ又は不機嫌を綺麗に隠した笑顔で部屋へと入っていった。

○○\*○○

今朝一番に椿の部屋に来たのは、可愛らしい女性とスローレットだった。

「彼女はヒス。椿の侍女だよ」

ヒスはスローレットの侍女の1人だ。

まだ侍女としては若い25歳の彼女だが、仕事熱心で真面目なところがスローレットは気に入っていた。

真面目だがまだ若いので、頭が固すぎるということがない。

ヒスならば適応能力も高いから椿の世話も任せられるだろうと踏んで、彼女を推薦した。

ヒスはぺこりと椿に頭を下げ、一言も口を開くことなく水の入った洗面器を椿のいるベッドに置き、カーテンを開け放った。

一見感じが悪く見えるが、規則上仕方のないことだ。

しかし椿はあからさまに渋い顔をしてみせた。

スローレットはそんな椿にすぐに気が付いた。

まだまだ短い椿との付き合いだが、彼女の性格は分かりやすい。

感情をまるで隠そうとしないのだ。

それはスローレットにとってまったく不快でなく、むしろ好感を抱けるものだった。

この城ではなかなかお目にかかれない人種である。

「ごめんね。気持ちが悪いだろうけど、少しの間我慢してね。契りを結ぶまでは、その相手以外とは会話しちゃいけない決まりがあるんだよ。今回は異例だから、僕とエルザ兄様と叔父のシェンリルといとこのダツチェスはいいつてことになってるけど」

「はあ？」

どんな決まり？と椿が漏らした。

そんな素直な椿の反応に、スローレットも素直にくすくすと笑う。

「周りからの影響を受けないように、って言われてる」

「意味わかんない」

椿としては理解できないことなのだろう。

会話ができないとなると、その4人以外とは意思の疎通が取れないということになる。

考えるまでもなく、そんなことは椿には耐えられないとスローレッ

トでさえ容易に想像がつく。

「その不便な決まり、なんとかできないの？」

椿が聞くと、スローレットは困ったように微笑んだ。

昔からの決まり事を、スローレット1人の判断で破る訳にはいかな  
いが、椿の気持ちに分からないでもない。

最終的に自分よりも立場が上の人物に全てを委ねようと考えた。  
そんな自分をズルいと思う。

最終的な決定をいつも誰かに擦り付ける。

兄のように責任感の強い立派な人間になりたいとは思いが、それと  
同時に兄のような人間になりたいとも思わなかった。

簡単に人を切り捨てる兄を、寂しいと思う。

見習いこそすれ、なりたいとは思えない。

あの寂しささえ抜ければと思うが、その日が来るのはいつなのだろ  
うか…。

来ればいい。

来て欲しい。

兄のためにも、自分のためにも、これからの国のためにも。

（椿のためにも、かな）

唐突にくすくすと笑い始めるスローレットを、椿は顔を渋くして見  
つめた。

不機嫌ではないのだろうか、それは人には不機嫌に見えてしまっ  
きつと本人は気付いていないのだろうか。

「エルザ兄様に聞いてみるといいよ。今日はシェンリル叔父様とダ  
ツチエスと一緒に来ると思うから、その時にでも、ね」



そう言いながら楽しがっているスローレットの内心は誰にも秘密のことだ。

兄があのように感情を表に出すことはめったになく、しかもそれが怒りの感情であれば尚のこと。

更に今回は兄と反りの合わない叔父がいるのだから、スローレットにはこれほどのないイベントだ。  
楽しまなければ逆に損である。

兄や椿には申し訳ないが、目一杯楽しませてもらうつもりだった。

そんな会話のすぐ後に、預言者リーナが部屋に姿を現した。  
相変わらずおどとした様子である。

椿がリーナに向かって「あの時の子！」と声を上げたので、おどおどは更に増した。

リーナは優しい少女だ。

経緯はよく知らないが、規則であっても無視することに罪悪感を抱いているのだろう。

そのせいで召喚直後に椿と会話をし、エルザイヌから大目玉を食らったとスローレットは聞いていた。

哀れでならない預言者を、せめて自分の前にいる時ぐらいは助けてやろうと、スローレットは口を開くのだった。

「預言者のリーナだよ。彼女との会話はエルザ兄様に許可を貰ってからにしてね」

椿がつまらなそうに舌打ちしたのを聞いて、スローレットは腹を抱えて笑いそうだった。

きっと兄にも同じことをしたのだろう、そう考えただけでしばらくは娯楽に苦勞しなずにすみそうだ。

（面白いね、今回の黒姫は）

○○＊○○

部屋にエルザイ又たちが侵入してきたことに、椿の目は自然と細められた。

先ほどまでは確かに楽しかった時間が、ものの見事に打ち砕かれた気分だ。

嫌いだ、どうしようもなく。

「こちらが叔父のシェンリル、そしてこちらがいとこのダッチェスです」

最初は綺麗だと思った笑顔は、今の椿には胡散臭いものにしか映らなかった。

この笑顔の裏では相当のことを考えているに違いない。

シェンリルと紹介された男は中年のひよろりとした風貌だった。

細い目が鋭く椿を捕えたまま口元をにやつかせている。

金髪の髪は決して風になびくことなく、ぴっしりと固められていた。まるでその人の性格を表しているようだ。

ダッチェスという男は、とにかく大きかった。

がっしりとした肢体にエルザイよりも高い身長は、それだけで人に威圧感を与えた。

シェンリルと同じ金色の髪は、短く揃えられている。

スローレットを抜いて考えれば、椿としてはダッチェスが一番接しやすそうだと感じた。

2人が同じように椿に礼をすると、椿も反射的にはあるが頭だけを小さく下げた。

「少しお話でもなさいましょうぞ、黒姫」

シェンリルがついっと前に出て椿に近付く。  
椿はそれをぴしゃりと言葉ではねのけた。

「今スローと話してたんで、また次回つてことに」

あまりこの男は好きではないと、直感的に思った。

何が、どこがと聞かれれば言葉に窮してしまうが、しいて言えばこの顔付きだろうか。

隠そうとしている裏事情がどことなく見え隠れしている。

エルザイヌのように綺麗に隠しきれていた方がいっそ清々しい。

その椿の言葉に、シェンリルは苦々しい顔をした。

（そーゆーとこだってば…）

いつか口に出してしまいそうだった。

#### 4（後書き）

遅い投稿申し訳ありません。

新登場人物が多くなりすぎないようという方向性を持って行きたいです。

しかし予定は未定です。

最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

どこか不貞腐れたような、そしてまたどこか意気消沈したように、シェンリルは部屋をふらふらと退室していった。

椿の反応がよほど堪えたらしい。

椿自身それに気付いていたが、どうしようもなかった。

元からどうしようとも思ってたのだから。

ダッチェスはぽかーんとしながら椿を凝視している。

しかしそんなダッチェスはお構い無しに、椿はエルザイヌに向き直った。

エルザイヌはどことなく素に近い笑顔を浮かべている。

「ちよつと相談があるんだけど」

「なんでしょう?」

素の笑顔から一変、素晴らしいまでの笑みを椿へと向けるエルザイヌ。

この猫かぶりめ!

と心の中だけで毒づいておく。

口に出さないのは、この綺麗な笑顔に押し返されてしまったからだ。  
った。

不覚にも心臓が大きく脈打った。

(嘘笑顔なのに...!)

そんな自分に腹が立つ。

純情な女を気取るようなキャラでは全くない。

面食いでもない。

なのに今の動悸はなんなのだ。

自分に向けていた怒りが、なぜだかだんだんと目の前のエルザイヌへと移行していく。

「…いろんな人と話したい。アンタたちだけじゃなくて」  
「できません」

エルザイヌはバツサリと椿の提案を切り捨てた。

視線の端でダツチエスがびくりと体を震わしたのが見えたが、椿はまったく意に介さなかった。

あまりの即答の速さに椿でさえも面食らう。

やはり好きにはなれそうにもない。

「す、少しぐらい考えなさいよっ！」

「考えるまでもありません。規則ですから」

「そんなん知らないっつの！このままじゃ不自由なの！」

「不自由だとお感じになるのですたら、お早く契りを…」

「わー！！うるさいばか！変態！アンタの頭にはそれしかないわけ！？」

言ってからはつとした。

言い過ぎたかもしれない。

エルザイヌの頬が痙攣したように笑顔のままぴくついたので、そう思わずにはいられなかった。

しかし出てしまった言葉を戻すこともできないし、変な意地から撤回することもしたくない。

椿はごくりと喉を鳴らしてエルザイヌの出方を待った。

「なぜそんなに契りを結ぶことを拒否なさるのですか？」

さも当然のことのようにエルザイヌは椿に問い掛けた。

わざと聞いているのならただ性格が悪いだけで済むのだが、本気で聞いているのだとしたら質が悪い。

これではまるで愛情の知らない子供ではないか。  
と、そこまで考えて椿はエルザイヌから視線をそらした。

（あたしだってそんなに愛情とか知らないじゃん…）

親は自分をほとんど放任していた。

頭を撫でられた記憶も、優しく抱きしめられた記憶もない。  
ケンカすらもしない。

ずっとコミュニケーションらしいコミュニケーションをとらないまま来てしまった。

学校行事は当たり前の如く欠席。

面談などの「どうしても欠席できない行事」の時は顔を出す程度はしたが、当たり前障りのないもので終わっている。

自分がどんな選択をしようと、一切口は挟まなかった。

小さい頃は周りが羨ましくて寂しくも感じていたが、さすがにその年齢は越している。

中学生あたりから、周りが賑やかならそれで良かったと思えた。

家に居場所がなくても、自分には外に居場所がある。

明るくて賑やかで楽しい居場所。

だから何も寂しくなんかない。

無断で外泊しようと、帰りが遅かろうと、「警察沙汰だけはやめてね」と言うだけで、咎めたりはしない母。

だから逆に「そっちもね」と返すと、「そうね」と返してくる、絶対に怒らない母。

ほとんど顔も合わせない父。

子供を愛さない両親。

「それで横道それた子供ってか」

「はい？」

「別に」

あんな風にはなりたくない。

自分にとつてあの両親は反面教師だ。

だからそういうことは心から愛した者とだけしたい。

そんな自分は子供染みているのだろうか？

「椿、どうしたの？」

大丈夫？と横から顔を覗き込んできたスローレットに、小さく笑みを向けた。

ここに来てスローレットだけが椿の支えである。

ここでは誰よりも常識人だと感じる。

椿は気を取り直してまたエルザイヌへと視線を向けた。

もちろん鋭い目線であるのは言うまでもない。

「アンタとそーゆーことは死んでもやらない。アンタだけじゃなくて、アンタとも、さっきのオヤジともぜえつたいやらない！」

椿はエルザイヌ、次いでダッチェスを指差し、ぎゃんぎゃんと喚いた。

その椿の言葉の後数秒時が止まり、それをぶち壊すかのようにダッチェスとスローレットが声を上げて笑い始めた。

ダッチェスは腹を抱えて笑い、スローレットは目に涙までも浮かべている。

目の前のエルザイヌは椿から視線を反らし、口元を手で抑えながら肩をプルプル震えさせていた。

これはもしかしくなくても笑っているのではないか？



「ちょ…、なんなのよアンタたちっ」

理由がわからない状態で言っではみたが、当然笑いの渦が治まる訳もなく。

唯一その渦に乗り切れてないリーナは、ぽかーんと口をあんどり開けた状態だった。

可愛い顔も台無しである。

「おま…、ほんと…！それはない！それはないだろ！」

「は、はあ？」

「椿…！もう…、本当にかわいいね」

「はああ！？」

笑いながらのスローレットの言葉に、理解はできないが赤面してしまった。

普段「かわいい」などと言われることはないに等しいのだから、そんな初な反応をしてしまう。

それが更に3人を煽ってしまうのだが。

「な、ななな…！なんなんだよっ…！」

いい加減イライラの最高潮に達した椿が、叫び出した。

それにはさすがに3人も笑いを抑えようとした。

しかし突然抑えきることができたら苦労はない訳で、喉の奥がくつくつなっている。

椿が3人を流すように睨み続けていると、目尻にたまった涙を拭きながらスローレットが口を開いた。

「ごめんごめん。椿があんまりかわいいこと言っただもん。ほんと、かわいい」

「かつ…！れ、連発しないでいいから！」

耳まで赤く染めた椿に、スローレットはまたしてもくすくすと笑いを溢す。

いつの間にかダッチェスは、椿に対しての壁がきれいさっぱりなくなっていることに気が付いた。

○○＊○○

「黒姫っていうのは、あんな初なものなのか？」

笑いを含んだダッチェスの言い方に、エルザイヌは口の端を自然と持ち上げた。

言葉の悪い低俗な輩かと思えば、耳まで赤く染めた今どき珍しい初な反応。

綺麗だな、と思った。

純粹と言ってしまうばそれまでであるが、それだけではない気がするのにはなぜだろう？

黒髪と黒い瞳を除けば姿形はあまりにも人並み、しかしどういう訳か自分を惹き付ける。

あんな人間を自分は知らない。

だから興味が湧くのだろうとエルザイヌは思考を切り替えた。

「ダッチェス、率直に聞いてもいいかな？」

ニヤニヤしていた表情は一変、真面目な顔を張り付けたダッチェス。エルザイヌはそれに満足げににこりと微笑んだ。切り替えが早いことは話がスムーズに進むのだ。

「君は国王になるつもりがあるのかい？」

率直に言うとは言われたが、ここまで率直だとは思っていなかった  
ダッチェスは目を開いてたじろいだ。

エルザイヌ自身も表面には分からないが、内心では驚いていた。

ダッチェスと話がしたいとは前から思っていて、今回はシェンリ  
ルもない最高のチャンスだった。

だからさつさと本題に入ろうとはしていたが、まさかこんな裏表の  
ない問いが自分から出るとは、自分でも予想外の出来事だ。

これがあの黒姫の純粹さの影響なのだとしたら、自分は意外と影響  
されやすい人間なのかもしれない。

「また随分と…、ストレートだな…」

「回りくどいのは君らしくないだろう？」

と、それらしい理由を述べてみる。

ダッチェスは「確かに」と言って苦笑した。

もしダッチェスが「なりたい」と言った場合、この状況はかなり不  
味いだろう。

この筋肉質のダッチェスに襲われたら一溜まりもないのは火を見る  
よりも明らかだ。

しかしエルザイヌには確信があつた。

「変わらないな、エルザは」

そう言つて頬を緩ませたダッチェスに、エルザイヌも素の柔らかい  
笑顔を浮かべることができた。

そして自分の勘にも近い確信が正しかったと理解した。

誰にも渡せないあの座席。

そのためならなんだってやるし、やれる自信がある。

それでも対象にできる人物としたいくない人物がいるわけで、ダッチエスは後者だった。

しかしもしダッチエスの返答が自分の意にそぐわなければ、躊躇な  
しで対象にする自信もあるが。

「国王という役職には興味はないんだ。はっきり言って、周りが盛り  
上がったちゃってるっていうか…」

ダッチエスは照れたように後頭部を掻いた。

このような素のダッチエスは、王族どころか貴族らしい雰囲気があ  
まりない。

だからこそ自分はダッチエスに好感を抱けるのだろうと思った。

「だから今回の黒姫召喚で任が解かれるとも思ったんだが…。あの  
黒姫じゃ時間が掛かりそうだな」

言葉の割には楽しそうな表情のダッチエスに、エルザイヌは心の中  
で同意した。

時間は掛かるだろう。

早く国王の座を得たいが、あの黒姫を無理やり組み敷きたいとは思  
わない。

ならば気持ちを持たせればいいのだ。

それすらも時間が掛かりそうではあるが。

「国王の座は僕が引き受けるよ。けれど、黒姫の心を紐解くのは手  
伝ってもらいたい」

ダッチエスに頼むのは根本的に間違っているように見えるが、信用  
の置ける人物としては最上の男だろう。

利用できるものは全て利用する。  
それが自分のやり方だ。

「ほんと、変わらないな」

「誉め言葉として受け取っておくよ」

変わらない、変われない。

そんな自分を良く思わないからあの黒姫やダッチェスに惹かれるのかもしれない。

その時どこから吹き込んできたのか、銀色の自分の髪がサラサラと風に流されて輝いた。

## 5（後書き）

更新が遅くなり、誠に申し訳ありませんでした。  
ダツチエスくんぶっちゃけましたね。

なんだかこの話は逆ハーを目指したいらしい…。

最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

## デート 1

「エルザイヌがいったって言ったから、あたしと喋っちゃっていいんだよ」

椿がそう言えば、皆が「ああ、そうなのか」とあっさり納得の言葉を吐いていった。

椿自身、ここまであっさりだと拍子抜けだったため、ならばと会う人会う人にその嘘をつきまくった。

そうなれば次の日に呼び出されるのは当然の事態であって。

エルザイヌの職務室でふてぶてしいまでの態度で現れた。

悪かれた様子を一切見せない椿だが、その心の内では申し訳なさいっぱいだった。

エルザイヌに負けた気がするのでツンケンした態度で立ち向かっているが、嘘をつくのはやはり気持ちの悪いことではない。

まだ出会って日が浅いというのに、その椿の心情が手に取るように理解してしまうエルザイヌが、更に椿のイライラを増させていた。

「嘘をつくのはいけませんね、椿」

「……………」

「しかも取り返しのつかない、質の悪い嘘だ」

「……………」

どうしてこの男はこう、人を追い詰めるような言い方しかできないのか。

思うが口にはできないのは、エルザイヌが間違ったことを言っていないからだ。

分かっているから更にイライラは増していく訳だが。

しかし呼び出した割にはそこまで怒っている感じではないエルザイ  
又が不思議だった。

「でもまあ、いいでしょう」

「え？ いいの！？」

思わずエルザイ又へと視線を向けると、にこりと微笑まれ、しまつ  
たと思った。

これではエルザイ又の思うつぼである。

椿はすぐにエルザイ又から視線を外した。

「ただ女性限定です」

「：なんのために」

「決まってるじゃないですか。あなたが俺以外の男に惚れないよう  
にです」

椿は口から火が出るんじゃないかと感じた。

この男のこのセリフは本心なのだろうか？

叫び出したい。

歯が浮く台詞とはまさしくこれだと椿は確信した。

極力関わりたくないと思うのに、エルザイ又を避けて通る道がどう  
しても見つからない。

親でさえ上手く避けて通れたのに。

「俺もだいぶ妥協したので、その程度は守っていただけますね？」

このいちいち突っ掛かるような言い方はどうにかならないのだろう  
か？

椿は重く深くため息を落とした。



「…別に誰にも惚れたりしないし。アンタにも」

誰にも惚れたりしない。

いや、できないのかもしれない。

親にさえ愛されなかった自分が他人に愛されるとは思えないし、もし愛されたとしても自分は愛せない気がしてしまう。

愛し方がわからない。

そこまでエルザイヌに言っただけやるつもりはないが。

エルザイヌはにこりと微笑みを椿に向けただけで、それ以上は何も言わなかった。

○○\*○○

椿はエルザイヌの職務室の扉を締め、深く重いため息を長くはいた。認めたくはないが、あの男は非常に手強い。

果たして自分の手に負えるのだろうか？

「大きなため息ですねえ」

椿が声のした方を振り返ると、昨日知り合ったばかりの顔があった。扉とは反対側の壁に背中を預けており、椿を面白そうに見つめている。

「昨日の…、ダッチェスだっけ？」

「お、覚えていただけましたか」

ダッチェスははからからと笑い、壁から背中を離れた。

そのまま自然に椿の隣にダッチェスは立ったが、椿はあからさまに

不気な顔をしてみせた。

エルザとダッチェスとシェンリルの中で誰が一番取っつき安そうと言えばダッチェスだが、それはあくまでその三人で選べばの話。まだまだ知らない人間だ。

「そんな警戒しなくても取って食ったりしませんって」  
「誰もそんなこと思ってないっつーの！」

そしてダッチェスは人の良さそうな笑顔になった。  
悪い人ではなさそうだった。

この手の男友達ならばあちらにはたくさんいた。  
接し方ならだいたい掴める。

「まあいいわ。それよりも、その気持ち悪い敬語はなんとかなんなの？」  
「あ？気持ち悪かったか？」  
「うん。めちゃくちゃ」

そしたらダッチェスはまた笑いだした。スローレットとはまた違った接しやすさがダッチェスにはあった。  
これぐらいがちょうどいい。

「これでも生まれてこの方、ずっと貴族だぜ？」  
「ふーん」  
「はは。今回の黒姫は反応薄いなー」

ダッチェスはまた声をたてて笑うので、椿はよく笑う奴だなとダッチェスを見た。

逞しい身体に似つかわしくない人懐こい笑顔。  
そのギャップにやられる世の女性は少なそうもない。

もし自分の周りの女友達であれば、まず間違いなく放つてはおかないはずだ。

「その黒姫つてのもイヤ」

「わがままばっかだな」

「うつさい。勝手に連れてきて言えた立場じゃないでしょ」

ダッチェスが小さい声で「確かに」と納得の言葉を漏らしたので、椿は心の中で吹き出した。

素直だ、見た目に反して。

椿はダッチェスと共に自室までの道のりをなんだかんだで楽しく過ごした。

自室に着くとダッチェスが「じゃあ」と片手を上げたので、椿はきょとんとしてダッチェスを見返した。

「そつえば、あたしに何か用だったの？」

わざわざエルザイヌの職務室の前で待ち伏せするぐらいなのだから、きつと何か用事があったのだろう。

今さらな質問ではあるが、気になったので椿は口にした。

ダッチェスは小さく笑った。

「本当はエルザに先に言うつもりだったんだが、まあいいか」

「なに？」

「デートをセッティングしといてやったぜ」

「……は？」

楽しそうな笑顔を向けてくるダッチェスの前で、椿は間の抜けた表

情をダツチェスに拝ませた。

○○\*○○

エルザイヌは机上にある資料から顔を上げ、楽しそうに微笑むダツチェスを凝視した。

そのエルザイヌの表情だけでダツチェスは満足だった。

いつも完璧なまでの嘘笑顔を振りまくエルザイヌの表情を崩すことは、なかなか難易度の高いことだ。

それができただけでもう達成感で溢れている。

「…デート？」

「ああ」

「…一応聞くが、誰が？」

「エルザが」

「…誰と？」

「黒姫…じゃなくて、椿と」

エルザイヌは頭を抱えなくなった。

ダツチェスのことは信用はしているのだが、どうもストレートすぎると言うか、バカと言うか…。

頭痛の種と言える発言である。

認めたくはないが、このバカストレートに黒姫の心を紐解く手伝いを頼んだ自分がバカだったのかもしれない。

「…なんでそういう考えになるのかな…」

さすがのエルザイヌもこの精神状態で仕事を続けることも適わない

ので、ため息を落としてつつ椅子の背もたれに身を預けた。  
ダッチェスは憂々とした表情でエルザイヌの職務机へと近付いた。

「契りを結んでもいいって思うには、やっぱお互いがお互いのことを知る必要があるだろ？でもここじゃ椿がああ調子だし、だったらちよつとぐらい遠出して気分転換なんかどうかなー」ってさ」

「…言ってることは正しいけど、現実味がないな。今はただでさえ仕事如山積みなんだ」

エルザイヌが机上の高く積まれた資料の山を見据えた。

これだけならまだしも、やらねばならないことはまだまだある。

国王がいない今、国王の仕事の大半はエルザイヌがこなしている。

それが前国王の遺言であり、エルザイヌがそれを受け入れたためだ。こなしてもこなしても、仕事はなくなったりはしない。

むしろ増えていく一方だ。

そんな状況で旅行なんかしている場合ではないというのは、いくらバカでも貴族の、しかも王家のはしくれであれば分かることなはずだ。

ダッチェスは職務机に両手を置き、エルザイヌに詰め寄った。

「だからだ。別に日帰りでいいんだよ、そんなの。言ってるだろ？これは単なる気分転換であって、ちよつとしたコミュニケーションの場だ。デートっつーのは、基本的に日帰りって決まってるんだよ、やらなきゃな」

思わずエルザイヌは苦笑した。

どこことなくダッチェスと椿に似通ったところがある気がした。

「ところでダッチェス」

「ん？」

「いつのまに黒姫とそんなに仲良くなったんだい？」

軽く流しても良かったのだが、参考までに聞いておこうとエルザイ  
又は質問を投げ掛けた。

ダッチェスは先ほど、椿のことを「椿」と名で呼んだ。

それも黒姫と呼んだところをわざわざ変えての椿だ。

ダッチェスは机から手を離し、からからと笑った。

「なんかさ、俺、椿の男友達に似てるんだと」

どうも参考にはなりそうもない。

## デート 1（後書き）

デート編に突入しました。

これで少しは椿とエルザさんの絡みが増えるといいんですけど…。

遅い更新申し訳ありません。

ご意見・ご感想・評価お待ちしております。

最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

ダッチェスの話を聞いたスローレットも、それはそれは楽しそうに話に乗った。

その様子を見た椿は、げんなりとスローレットを見つめる。

「誰が行くって言った？」

「あれ、行かないの？」

行くわけないだろ！と叫びたい気持ちを抑え、代わりにため息を落とした。

なにが嬉しくて苦手な人間とデートなるものをしなければならないのか。

どう考えても理解できない。

「そもそも、あの男が断るんじゃないの？」

椿の中で、エルザイヌという男がその話をよしとするとは思えなかった。

あの男は感覚ではなく、仕事だったり役目のために動く人間だと感じている。

動きの一つ一つが計画されたことのような、無機質なロボットのようだと椿は思った。

また麗しい姿形をしているため、それはなおさらだ。

そんな男がデートなど、不釣り合いにも程がある。

「エルザは俺が説得済み」

ダッチェスが部屋の壁に身を預けた状態に得意気な顔でそんなこと



を言ったものだから、椿の額に青筋がたった。

説得したことも、説得されたことも気に食わない。

どこまで自分に嫌がらせをすれば気が済むのか。

「行つておいでよ、椿」

「他人事だと思つて適当に……。あたしはあの男が好きじゃないの！ そんな男とデートなんて、考えただけで鳥肌もんだつつの」

そう言つて、椿は大袈裟に身震いをしてみせた。

スローレットやダッチェスがいるならまだしも、二人でなんて冗談じゃない。

二人が来たとしても、素直に頷けるかは疑問だが。

「そんな頑なになるなよ。エルザを知るいいきっかけになるし」

「別に知りたくない」

「それに！ 椿は城の外に出たことないだろ？ 出てみたくないか？」

と、ダッチェスからの誘惑の言葉が掛かると、椿はあっさりと頑なな心が折れそうだった。

出たい。

この狭い空間から出てみたい。

そう言われてみれば、まだこの城内でさえも一人きりでは自由に歩くことさえままならないのだ。

それがコブつきではあるが、外に出ることを許された。

それは相当な進歩じゃないか？

「僕も前から思つてたんだけど、黒姫つて国のために存在するのに、この国のことを何も知らないで使命を終えて帰っちゃうんだよね。それっておかしいなつて思つてたんだよ」

先ほどのまでの楽しそうな笑顔から一変、スローレットは真剣そのものの表情でそう言った。

確かにスローレットの言う通り、椿がその行為に頓着しない性格であつたのなら、契りを結んでさつさと日本に帰っていただろう。長々とここに居座る理由などないのだ。

だから知らなくてもなんの支障もきたさない訳で、ゆえに教えようという機会さえなかったのだろう。

黒姫に求められるものは知識や技術でなく、その行為のみなのだ。椿としてはそのことになんの依存もなかったのでスローレットの意見に賛同している訳ではないが、城下町なるものに興味はあつた。城がこんな西洋風に豪華なのだから、城下町も西洋風な気がする。メルヘンな性格ではないが、やはり女には変わらない。

（外国に來た気分。って、一応外国か…）

椿は悩みに悩み、結局二人の説得の甲斐あつて首を縦に振つた。

○○＊○○

（二人じゃないんじゃない…）

初めての乗馬のことよりも、背後で同じように馬に乗り込む数人の男たちを見て椿は思った。

でも、と椿はその男たちを凝視した。

いつぞやのエルザイヌの部屋にいた男もそうだが、屈強そうないかつい男たち。

次期国王と言われる男に、護衛の一人や二人いたっておかしくない。  
むしろいなきやおかしい。

（護衛を付けなきゃいけないぐらい大変なら断れよっての）

承諾した自分を棚に上げ、椿は不機嫌そうに騎乗のエルザイヌを睨み付けた。

ただ馬に乗っているだけなのに、どうしてこの男はこんなにも絵になるのだろうか？

エルザイヌが乗る黒い馬は椿を見て小さくいなないた。

「不満そうな顔ですね」

「べつつにい？」

言ってそっぽを向いてやると、エルザイヌはくすくすと笑った。

この余裕の笑みが椿をイライラさせると気付いているのかいないのか、エルザイヌは気にすることなく椿に手を差し出した。

「…なに」

「乗らないのですか？」

「は？なんであたしがあんたの馬に…」

椿がそう言っただけで、エルザイヌはきょとんと不思議そうに椿を見返した。

「椿は馬に一人で乗れるのですか？」

「いや、乗れないけど…」

「ならば誰の馬に乗るつもりなんです？」

「べ、別にあんたのじゃなくなっちゃっていいじゃん」

エルザイヌは「おや」と大袈裟に驚いた顔をしてみせた。そのすぐ後にくすりと微笑みを溢した。

「僕はデートというものは、二人が同じものを同じように共有するものだと思っていますので、椿は当然僕の馬に乗ると考えていたのですけど」

エルザイヌが言っていることは間違っていない。

だからこそ椿はその端正な顔を殴り飛ばしたい衝動に駆られる。

いつそ黙ってさえいてくれたら、もう少しは違った対応もできたのだろうが。

ともかくにも、もう逃げられそうもないと確信した椿は、エルザイヌの手を借りながら馬にまたがったのだった。

もちろん辺りに響くぐらいの舌打ち付きで。

ゆつくりと歩く馬。

さらさらと心地の良い風。

美しい草原の中の一歩道。

申し分ない環境であるはずなのに、椿は居心地が悪くて仕方がなかった。

初めての乗馬は置いておくとして、何が嬉しくて好きでもない男の腕の中に収まらないといけないのか。

しかも、それを数人の男たちに見られているのだ。

（あたしは見せ物じゃないっつの）

椿は早くも怒りの沸点に達しそうなことを感じた。

その時、背後でくすりと笑う声が聞こえたので、椿は顔だけを振り

向かせ、想いの限りにその端正な顔を睨み付けた。

「あ？」

「いや、そろそろかなと思って」

「なにが」

「椿が怒りだす頃」

馬の上でなければ、恐らく平手打ちぐらいはお見舞いしていたかもしれない。

わざわざ言わなくてはならないことか？

それが更に自分を煽るとは思わないのか？

「…あんだ、本気でム力つく」

「お褒めに預かり光栄です」

「…黙れ」

「椿も口を閉じた方がいいですよ。舌を噛みます」

エルザイヌの言った意味が分からなかったので、椿はもう一度エルザイヌを振り返った。

どきりと、いつぞやにも感じた脈の唸りを椿は感じた。

エルザイヌはいたずらっ子のような笑顔で椿を見下ろし、そつと耳に顔を近付けた。

「この先の森に入ったら馬を走らせる。だから俺の腕をしっかりと掴んでおいて」

周りには聞こえていないであろう声音でエルザイヌは言った。

しかし説明不足にも関わらず、椿の質問は一切許されなかった。

なぜなら、もうすぐ森というより目の前はもう森で、椿が言葉を発するより早くにエルザイヌは馬を走らせたからだ。

なので椿は必死に掴まっていることしかできず、唯一できたことは、馬が走りだした直後に「エルザイヌ様！」という背後の数人の男たちの悲痛の叫びのようなものを聞くことだけだった。

## 2（後書き）

意外とやんちゃなエルザイ又兄弟でした。

さて、このデートはいいことになることやら…。

最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

不本意ではあったが、今までに味わったことのない振動と騎乗の不安定さで、知らぬ内に椿はエルザイヌの腕にしがみついていた。馬がゆっくりと走りを終えても、まだ揺れている感覚に襲われている。

映画やドラマなどで優雅に乗馬をしている俳優たちの苦勞が分かった気がした。

馬に他意はないが、嫌いになりそうだ。

「うまく撒けたみたいだ」

エルザイヌは満足気な声を上げ、椿の顔を覗き込んだ。その顔はどこか青白い。

「大丈夫？」

「……んな訳ないでしょ……」

自然と低い声が飛び出たが、相手がエルザイヌということもあって別段気にした様子はない。

そんな椿にもいよいよ慣れてきたエルザイヌは小さく笑い、「お疲れ様」と軽く言っただけだ。

「せっかくのデートだし、邪魔は嫌だろう？」

口調が変わってやしないか、と思う椿だが、面倒なので黙っておく。どうせこの男は誤魔化すに決まっているのだ。特に知りたくもないし。

エルザイヌは椿から視線を外し、前方を眺めた。



椿も釣られるようにそちらを見ると、森の中に静かに存在する湖が目に見え込んだ。

幻想的とも言える光景に、椿は小さく息を呑む。

向こう側まで見える程の小さな湖は、陽の光をキラキラと反射させ、水面に虹色を浮かび上がらせている。

少しの風でも揺れる水たちは、まるで生きているかのように踊った。椿は黙り込み、食い入るようにただただ湖を見つめた。

エルザイヌはひよいと馬から飛び降り、支えられながら椿も馬から降りた。

支えられなければならないことに反発をしてもよかったが、今はこの幻想的な気分浸っていたかったので、椿は口をつぐんだ。

「小さい頃は城を抜け出して、よくこの湖に来ていた」

馬の紐を木に括り付け、エルザイヌは湖の近くにそのまま腰を下ろして話し始めた。

エルザイヌが「座れば？」と言う風に自分の隣を促したので、椿はそこから少し離れた場所に座った。

エルザイヌはそれを見て少し笑ったが、頑張れば手の届きそうな位置に座ったのは、椿の精一杯の譲歩だった。

「当時はまだ国王になりたいなど、これっぽっちも考えていなかったな」

エルザイヌがいったい何を言いたいのか、椿はいまいち分からないので、相槌も打たずにいた。

二人になった途端に化けの皮が剥がれたようだ。

「たまにスローも連れてきたが、あいつは遅くてね。すぐに見つかってしまいうから、ここにスローを連れてくるのは好きじゃなかった」

話の趣旨がまったく見えてこない。  
しかしエルザイヌの表情は作り物ではなく、素の笑顔のように見えた。

「昔話をしにきたわけ？」

「いや。椿をここに連れて来たかったただけだ」

どくり

と、またしても心臓が自己を主張した。

いったい自分はどうしてしまったのだろう？

こんな口先だけの男に…。

思うだけで、椿は拒絶の言葉を吐くことができなかった。

「椿といると不思議な気分になる。国の頂に相応しいよう自分で作った殻を、椿はいとも簡単に割ってしまうんだ」

「殻……」

椿がエルザイヌを見ると、端正な横顔が伺えた。

きらきらと煌めく髪が、エルザイヌの顔を優しく撫でる。

言葉の割りには楽しそうに笑うエルザイヌが、今はなぜか眩しく見えた。

（いつも眩しいような気はするけど……）

「不思議だ。これが黒姫の力なのか」

エルザイヌは自問するように言い、そして笑った。

エルザイヌは先から椿のことを「不思議」と言うが、椿も不思議に思っていた。

この湖に着いてから、エルザイヌは恐ろしく大人しい。

そして素だ。

この湖がそうさせているのか、あるいは自分が大人しいからなのか。そう、なぜか自分でも今の自分は大人しいと思う。

その理由は簡単だ。

エルザイヌが素のようだから。

「いつも今みたいにしていればいいのに」

小さく呟いたつもりだったが、エルザイヌには聞こえたらしい。

エルザイヌは椿を振り返ったが、視線を合わせたくなくて、椿は湖を見つめた。

「どうして？」

「あたしは猫被りも嘘つきもキライだから」

椿が言う「なるほど」とエルザイヌはくすくす笑った。

「椿に嫌われたくないし、椿の前だけでなら努力してみよう」

椿には嘘か誠かの判断は難しかったが、真実だったらいいなと椿は思った。

理由は考えないことにした。

○○＊○○

エルザイヌとの他愛もない話は、何度となく椿を笑わせることに成功した。

こちらに来てまだ日が浅い椿だが、スローレットやダッチェスとは

違う何かをエルザイヌの中に見出だしていた。

それは安心感にも似たようなもののだが、椿はその感情に名前をつけることができなかった。

知らないだけなのか、知りたくないのか。

椿自身は両方だろうと結論付けた。

今はまだ知らなくてもいい。

知らないままの方がうまくいくことだってある。

そう自分に言い聞かせて。

「そういえば、あの女の子。えっと……、リーナ？その子にもうちよつとぐらい優しくできないの？アンタに対してすごい怯えてるみたいだし」

こちらに来てから椿は何度かリーナと過ごす時間があつた。

いつも人より一歩後ろにいるような控え目なタイプのリーナは、椿が元いた世界で出会っていたなら、あまり接点がないタイプである。まだ仲が良くなったとは言えない椿とリーナだが、お互いの性格はある程度把握するほどには接していた。

椿やスローレットと会話する時とは明らかに変化するリーナを、出会った初日から椿は気にしている。

恐怖にも似たようなあの青ざめ方。

経験したことがある椿にとって、放っておくこともできないでいた。その原因が現在目の前にいるのだから、言わない手はない。

「彼女が普通の女性であるなら、いくらでも優しくしたさ。彼女の家はそれなりの名家だしね。でも彼女は預言者だ」

預言者リーナ。

彼女のことを皆そう呼ぶが、椿にはいまいち理解できないことだった。

椿の世界にそのような人物がいなかったから、それは当然のことなのだが、預言者であるが故にエルザイヌに怯えるというのだから、預言者とはなんなのだろうと疑問に感じた。

その旨を椿があえて口にしなくても、エルザイヌはそのことを察した。

「預言者とはダステイニー二国の歩む道を導く者のことだ。道から外れたならば軌道修正をするし、止まっていれば背中を押す、といった具合か」

分かるような分からないような、そんな表情を椿はエルザイヌに向けた。

そんな椿を見返し、エルザイヌは「うーん」と唸りながら空を仰いだ。

「簡単に言えば、国王のお目付け役的な立ち位置ってどこか」

「お目付け役？」

椿はリーナのことを思い浮かべ、首を捻った。

あれが国王のお目付け役？

今の現状の流れでいくと、エルザイヌのお目付け役ということになる。

「ありえない……」

エルザイヌのような裏表がはつきりしている男を、少し詰れば泣き出してしまいそうなあの少女が、お目付け役をするなど、あまりにも荷が重すぎる。

逆ならばまだ有り得るだろうが……。

「ついこの間リーナと初対面だった椿でも思っただから、俺の気持ちも分かってくれるだろう？」

リーナには申し訳ないとは思いつつ、椿は心の中で首を縦に振った。先のエルザイヌの説明で預言者というものを理解した訳ではないが、国にとって重要なものだということは伝わってきた。

だからエルザイヌも必死になる。

必死という言葉が正しいとは思わないが、椿が考え付く中では、一番しつくりきた。

それが裏目に出ている気も少なからずするのだが。

「もっとそれらしく振る舞えばいいのに。俺みたいに」

「俺みたいにつて、やっぱ作ってんだ、あれ」

「あれ」とは、言わずもがな猫を被っている時のエルザイヌである。椿の言葉に、エルザイヌは当然だと言わんばかりの顔を椿に向けた。

「素であんなことできないだろう、普通」

驚きを通り越して、椿はぷつと吹き出した。

まさかエルザイヌが普通を語るとは思わなかった。

エルザイヌはそんな椿を怒りこそしなかったが、不思議そうに見つめた。

「アンタは普通じゃないでしょ」

「相変わらず失礼だな……」

クスクスと笑いながら、心の奥底の椿は首を捻っていた。

なぜこんなに穏やかなんだろう？

なぜ自分はこんな穏やかに笑っているんだろう？

「俺の半数以上は『それらしく見えるように振る舞う』行動でできてる。喋り方とか、この髪とか」

「髪？」

「長い方が珍しくてそれらしいだろう？」

そう言っただけ自分の髪の毛先を掴んだエルザイヌを、椿は呆れよりか感心の眼差しで見つめていた。

そうまでしてしがみついていたもの。

自分を偽ってまで欲しいもの。

そこまで執着できるエルザイヌを、椿は羨ましく感じていることを認めた。

羨ましいとは思わが、それと体を許すことはまた話が別なのだが。

「疲れたりしないの？」

「気付いた時から身に付いていたからな。まあ、全然疲れないってことはないんだろうが……」

自分のことであるのに、エルザイヌはどこか他人事のように言った。偽ることを疲れるとか疲れないと、そういった分け方をしたことがないエルザイヌにとって、椿のその質問の答えは難しかった。

それが当たり前。

疲れるもなにも、いつもそうしていたのだから、そんな概念はエルザイヌにはないのだ。

「そういえば、椿は猫被りがキライなんだっけ。どうして？」

椿は面倒そうにエルザイヌの面白そうな顔を見返した。

「疲れるから」

「疲れるって、俺は別に……」  
「あたしが疲れるの」

猫を被る、偽る。

それらは対する相手と距離を置きたいが為にする。

距離を置かれること事態を気にしているのではなく、距離を置きたいと相手が思うことを、椿自身が察知してしまうことに原因があった。

昔から相手が自分のことを避けたいと思う気持ちを察知しやすかったため、椿は逆に気を使う羽目になる。

避けたいのならば自分から避けよう。

そう思うから、面倒だった。

いつの間にか、相手よりも自分の気持ちの方が大きくなっていると  
いった状況がよくあった。

（親のせいかも……）

思った瞬間に幼き頃のことを、椿の頭の中をフラッシュバックする。

親が自分によそよしく接するから、うまく甘えられなくて。

うまく自分から接していけないから、親との関わりなんて築けなくて。

避けられるようになれば、いつの日か自分も避けるようになった。

自分から歩み寄れば、今とは違う関係が築けたのだろうか？

避けられることもなく、そして自分も避けずに過ごせたのだろうか？

「ならこうしよう」

「え？」



椿は思いに耽っていたため、エルザイヌが自分に振り向いていたことに気が付かなかった。

その顔は面白そうににっこりしている。

「俺も椿も疲れないために、椿の前だけはやっぱり『これ』でいく。構わないだろう?」

「あたしの前だけ?」

「椿には俺の疲れを共有してもらおうか」

そのエルザイヌは本当に満足そうで、椿も一緒になって笑顔を向けていた。

「ほんと、アンタって迷惑」

言葉とは裏腹に、満たされたものが椿の胸を暖めた。

### 3（後書き）

少しと言わず、かなり歩み寄った二人でした。

デート編はもう少し続きます。

最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

空がうつすらと赤らんで来た頃、しばらくの沈黙をエルザイヌが破った。

ずっと音もなく立ち上がったエルザイヌは椿を振り返り、その左手を差し出した。

「そろそろ帰ろう。ゼーレが痺れを切らしたみたいだ」  
「え？」

椿はその差し出された手を借りることなく立ち上がった。  
エルザイヌは小さく笑い、そして椿の背後に視線を移した。

つられるように椿も背後に視線を向けると、いつからいたのか、エルザイヌの黒い馬と土色の馬がもう一頭寄り添うようにそこにいた。そしてその馬の横には、いつぞやエルザイヌの職務室にいた大きな男が、黙ってこちらを見つめていた。

「い、いつからいたの……」  
「椿が『猫被りはキライ』と言った辺りぐらい」

椿はエルザイヌを目を丸くして見つめた。

気配もなくそつと現れたゼーレにもそうだが、そのゼーレに気付いたエルザイヌにも驚きだ。

椿は自分の注意力のなさだろうかと考えたが、恐らくそうではないだろうと思った。

おかしいのはこの二人だ。

「よくここにいてわかったよね。完全に巻いたと思ってたけど」  
「ゼーレには適わないんだ」

そう言つてエルザイヌはにこりと微笑み、ゼーレに小さく手を振つた。

ゼーレはそれを受けて頭を垂れた。

エルザイヌが素直にゼーレに負けを認めているということは、それは信頼の証だろう。

椿はなぜだか、暖かい気持ちになったのだった。

○○＊○○

帰りの馬は、それはそれはゆっくりと歩を進めた。

行きと同じようにエルザイヌの腕の中に収まっている椿だが、その心境はがらりと変わっていた。

エルザイヌに対する感情も、その周りの人間に対する感情も、そして黒姫という自分自身の立ち位置に関しても。

城に着く頃には、巻いた全ての男たちがエルザイヌを取り囲むように配備されていて、事の重大さを物語っていた。

エルザイヌは「すまなかつたね」といつもの嘘笑顔で言い回ったおかげで、男たちから反論の声は上がらなかった。

「心にもないことをいけしゃあしゃあと……」

「これも仕事だ」

そんな会話が馬上でされていたなどと、誰も思いもしないだろう。

エルザイヌたちを出迎えた大勢の人間の中に、スローレットとダッチェスの姿もあった。

その二人が馬上で和やかな雰囲気では会話をするエルザイヌと椿を見て、それはそれは目を丸くして見つめた。

二人もデート作戦がこれほどまでに上手くいくとは思っていなかったのだ。

いったい何があったのだらうと二人は顔を見合わせたが、答えが出てくるはずもない。

「こりゃ質問攻め決定だな」

「だね」

そんな二人の楽しい会話とは裏腹に、城内のあるバルコニーでは、椿とエルザイヌを苦々しく睨み付ける男がいた。

「若造が……！私を苔にしおってからに！」

今にも地団駄を踏みそうな勢いである。

その様子を部屋の中で軽く微笑みを携えながら、バルコニーの男とそう年代が変わらなそうな男が見つめていた。

「気をお沈めくださいませ、シェンリル様。事は始まったばかりではありませんか」

「そうは言うが……。あの黒姫はなぜだか私を避けようとするのだぞ？」

「見たところ、今回の黒姫はまだまだお若い。私どものような中年の男には、あまり免疫がないのでしょう。なに、大丈夫です。言っただけではありませんか、まだ始まったばかりだと」

「し、しかし……」

「信じてください、シェンリル様。私が間違ったことを言ったこと

がありましたでしょうか？」

その男の一言で、シェンリルは渋々ながらも口を閉ざした。いつもシェンリルの一番近くでその道を示していた人物だ。今さらシェンリルが疑う訳がない。

そのことをこの男自身もよく理解していて、最後にその言葉で締めくくったのだ。

「理由はなんであれ、要は選ばせればいいだけの話なんですよ」

その男の呟きにも似た言葉は、シェンリルに届くことはなかった。シェンリルはまた外のエルザイヌを睨み付けており、今度こそ地団駄を踏んだ。

「モビル。そなたに任せるぞ」

「お任せくださいませ」

黒い渦が大きくなりつつあることを、椿はまだ何も知らないでいた。

○○＊○○

椿がシャワー室から出てくると、冷たい飲み物とデザートらしき物がテーブルに置かれていた。

随分と気のきいたことをする人がいるなと思いながら、椿はそのデザートを目に見つめる。

よくよく観察してみれば、それは一人分ではなく、二人分用意されて

いることに気付いた。

そういえば、と椿は夕食時でのヒスとの会話を思い出した。

「夕食後にスローレット様がお話したいそうなのですが、よろしいですか？」

「夕食後？別に今でもいいのに」

「そういう訳にはまいりませんよ。お食事は黒姫様にとって大切な儀式の一つとも言われていますから」

「儀式い？夕飯を食うことが儀式なわけ？」

「……精を付けるために重要なことです」

「ふーん。スローだけなんだ。ダッチェスは？」

「ダッチェス様は騎士団副団長であらせられますから、きっとお忙しいのでしょ」

スローが来ると聞いてヒスが用意してくれたのだろう。

とはいえ、スローに聞かれることは分かっていた。

椿はテーブルの上に置かれている丸い一口サイズの物を、手掴みで口の中に放り込んだ。

甘くもちもちとした食感が、椿の世界で言うドーナツに似ている。

「黒姫様ったらはしたないなあ」

突然だったので椿はびくりと肩を揺らした。

声のした方を振り返ると、くすくすと笑みを振り撒きながら、スローレットが部屋に入ってくるところだった。

「の、ノックをしなさいよ、ノックを」

「ごめんごめん。ちよつと驚かせようと思って。でも逆に驚かされちゃったね」

十分驚かされたけど、と椿は心の中で毒づいた。  
スローレットはゆったりとした動きで椿に近付き、「どうぞ」とソ  
ファーに座るよう促した。

「エルザ兄様と仲良くなれたんだね」

「仲良く」という言葉が正しいかは分からないが、椿は「まあ……」  
と濁しつつも否定はしなかった。  
実際に前まで感じていた嫌悪感のようなものは、きれいさっぱりな  
くなってしまった。

自分でも不思議な程に後腐れなく消えてしまったので、どうにも説  
明しにくいものがある。  
しかしスローレットはその理由を問いただそうとはしなかったので、  
椿は心なしかほっとした。

「良かったね」

「良かった、のか……？」

エルザイヌと打ち解けられたことで、椿自身は幾分が重荷のような  
物が降りた気はするが、それが周りから見て良いか悪いかというの  
は椿には分からなかった。

どう良くてどう悪いのかも分からない。

まだそれ程、この国のことを理解できていないのだから仕方がない  
のだ。

「僕は良かったと思うよ。エルザ兄様と椿にとって」  
「？」

椿は不思議そうに隣に腰を下ろしたスローレットに視線を送った。  
スローレットは出されたお菓子に手を出すことなく、ただ見つめる



だけで口を開いた。

「エルザ兄様って、なんでも卒なく完璧にこなせちゃうんだよね。勉強も乗馬も剣術も職務も、本当になんでも。弱点なんか無いんじゃないかってぐらい」

なんとなくだが、椿にも納得できる節があった。

出会った当初はロボットのようだとまで感じていたのだ。

今日の会話でそうではないと気付けた訳だが。

「でもそれってすごいことだけど、悲しいことでもあるんだよ」

「悲しいこと？」

「うん。エルザ兄様は誰にも頼れなかったから、自分一人で完璧にするしかなかったんだと思う」

人が一人で生きていくのは難しいと言われている。

それは人には得意・不得意があるからというのも、理由の一つなのだろう。

あのエルザイヌのことだ。

不得意も難なく得意にできたのだろう、と椿は一瞬考えたが、すぐに違うと思った。

得意にしたのではなく、得意になったように見せ掛けたのではないか。

いくらエルザイヌが器用であつたとしても、すべてを完璧にこなせるなど神様でも無理だ。

でも出来ないことも出来るようにしなければいけなかった。

自分は知らないけれど、エルザイヌは追い込まれていたのかもしれない。

そうして出来上がったのが、あの猫被りエルザイヌだったということだろう。

「だから、ありのままエルザ兄様に接してた椿に、ちょっと期待してた」

「ありのままって……。ただ当たり散らしてたようなもんなんだけど……」

「ううん。そうやってエルザ兄様に接する人、今までいなかったから」

スローレットはくすくすと笑い、椿の頭に手を置いた。

突然のスローレットの行動に椿はぎよつとし、体を強張らせた。

ただイヤという訳でもなかったので、突っぱねたりはしなかった。

「エルザ兄様と椿があんなに仲良くなつて帰つて来たから、びつくりしたよ。ダツチエスもすぐ驚いてたよ。だから二人にとって、有意義な時間になったんだなあって思ったし、仲良くなれて良かったねって思った」

「う、うん……」

「でもね、僕にとっては良かったって思わなかったんだよ」

「は？」

さつきまで散々「良かった」と連呼したのは、間違いなくスローレットである。

それがいきなり180度方向転換され、いよいよスローレットが何を言いたいのか分からなくなった。

「な、何言ってるか全然わかんないんだけど……」

スローレットは面白そうに椿を見つめ、椿の頭を撫でるのをやめた。

「見てて面白くなかった」

「はあ？面白いも面白くないもないでしょ……」

「面白くなかったんだよ、本当に。つい昨日までは僕にしか心を開いてなかった椿が、いつの間にかダッチェスにもエルザ兄様にも普通になってるんだもん。ちょっと妬けちゃったのかな」

「や、やけ……？」

椿にはスローレットの言いたいことがまるで分からなかった。

分かりたくなかったただけなのかもしれない。

しかし次に続くスローレットの行動で、椿は嫌でも気付かされる羽目となるのだった。

「じゃあ、そろそろ帰るね。また明日、おやすみ黒姫様」

ちゅ

椿の額に押しあてられた柔らかい感覚。

それがなんであつたのか椿が理解するのは、スローレットが完全に退室してからのことだった。

不覚にも顔は茹でダコのようにだし、キスされた額は驚くほど熱を持っていた。

可愛い弟のようだと思っていたスローレットのことだが、考えを改めねばならない。

スローレットも男なのだ。

「あのくそガキ……」

誰もいない部屋でスローレットに暴言を吐くが、それはあまりにも弱々しかった。

#### 4（後書き）

確信犯だね、スローくん！！  
やっぱエルザさんと兄弟らしいです。

最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

## パーティー 1

ふと考えると、こちらに来てから椿は随分と規則正しい生活を送っていた。

夜更けまで起きていたことはただの一度もない。

あちらにいた時はそれが当たり前だったのに、なんとも不思議な気分だ。

そうしなくても居場所がある。

理由はなんであれ、黒姫という立場が椿の居場所を作り上げていた。心地いい。

今では隠すことなくそう思えた。  
もちろん口に出すことはないが。

「椿、少しいいか」

そうエルザイヌに呼び出されたのが、つい一時間前のこと。

前は飛び出したエルザイヌの職務室に、今はなんの警戒心もなくソファ―に身を沈めている。

当の呼び出したエルザイヌは、椿に「少し待っててもらえるか」と告げ、机上の書類を片付けていた。

すぐに怒りだすだろうと思っていた椿は、時が来るまで大人しくそこに座っていた。

エルザイヌが不思議そうに椿を盗み見ると、思いに耽ったような椿がいる。

怒りだせば仕事を中断しようと思っていたが、それを待っていたら陽が暮れそうだと感じ、エルザイヌはペンを置いた。

そのまま椿の向かい側のソファ―に座ると、椿はぱっと思考を切り替えてエルザイヌと対峙した。

「もういいの？」

「取り敢えずは」

椿は興味がなさそうに「ふーん」と声を出した。  
実際、エルザイヌの仕事に興味はない。

あるとすればエルザイヌ自身についてのことだが、椿は素直にそんなことを言える性格ではない。

「……で、なんか用事なんですよ？」

「ああ。椿はまだしばらくこちらに居ることを見越して、城で夜会を開くことになったんだ。それで……」

「ちょ、ちよつと待った。今、なんて？」

聞き慣れない名詞だったが、まったく知らない名詞でもなかった。  
が、分かるからこそ慌てるのだが。

そんな椿をエルザイヌは不思議そうに見返した。

エルザイヌ自身はおかしなことを言った自覚は何もなかったし、思い返してみても特におかしな点は思いつかない。

「まだしばらくこちらに居ることを見越して？だって椿……」

「そこじゃない。いや、そこも問題と言えば問題だけど……。その後」

「……もしかして、夜会？」

椿は聞きたくなかったと言わんばかりに顔を歪めた。

聞いたのは自分の方であるというのに、勝手な反応だという自覚は少なからずある。

しかし夜会といえば、それはつまり……

「パーティーってこと……」

「ああ、そうとも言っね」

エルザイヌには気にした様子もなくさりと答えた。  
椿は頭を抱えなくなった。

実際椿は両手で頭を抱え込み、エルザイヌは更に首を傾げるしかない。

そこでエルザイヌは何か閃いたように「ああ」と声を上げ、にっこりと椿に微笑み掛けた。

「パーティーの作法のことなら心配いらない。俺がとっておきの先生をお呼びしておいた」

「作法なんてどうでも……、え、なに？先生？」

「ああ。少し厳しいが、頭の良い真面目な方だ。俺も昔は世話になった方だから信用も置けるし、問題ないだろう？」

「どこがよ！問題だらけじゃない！」

いつの間にか、いつも通りの椿がエルザイヌの前にいた。

パーティーというものの椿の知識は映画によるものだ。

煌びやかな広いホール。

ヒラヒラの歩きにくそうなドレスに、こてこてと重そうな髪型の淑女たち。

タキシードに身を包んだ紳士にエスコートされながらのダンス。  
うふふ、おほほ、と会話をするイメージが椿の頭を占めている。  
考えただけで耐えられそうにもない。

「無理！死んでも無理！」

椿は叫ぶだけ叫び、ため息を落とした。

どうあってもエルザイヌは椿を放っておく気はないらしい。

ならばもう少しでもお手柔らかに願いたいものだ、と椿は恨めしそ

うにエルザイヌを睨み付けるのだった。

○○＊○○

椿のダスティニー二でのもっぱらの服装は、こちらに來た時の紺の制服か、こちらでの輕装とされる丈が長めのワンピースだった。そのワンピースを着ることに抵抗はあったが、毎日制服を着ることも憚られたため今に至っている。しかし今はどうだ。

「ダメよ、そんな色のドレス。椿様にはお似合いにならないわ」

「あら、どうして？黒姫様には黒のドレスが一番じゃない」

「黒姫様だからって黒が似合うとわ限らないわよ。椿様にはやっぱり桃色のドレスが一番だわ」

「いいえ。絶対黒！」

「桃色！」

椿の部屋の中ではヒスト、また新しく黒姫付きの侍女となったアーニヤの言い合いが始まっていた。

桃色を推すのがヒスト、黒を推すのがアーニヤである。

椿はげっそりした様子でそれをソファァーから見つめた。

ドレスなど椿にとってはどうでもよくて、むしろ着たいとも思えなかった。

もちろん椿も年頃の娘なためドレスに対する憧れのような感情はあるのだが、これから会う作法の先生への憂鬱の方が何倍も大きい。椿は知らずの内にため息を落とした。



「どうしたの？ため息なんかしちゃって。幸せが逃げちゃうよ」

隣からのスローレットの言葉に、椿はじつとりとした目を返した。それはもう睨んでいるに近い目つきである。

「幸せなんか当の昔に無いけど。でなきゃこんなとこいないしね」

その椿の言葉を聞いたスローレットのなんと悲しい顔のことが。椿でさえも言葉に詰まるものがある。

これだから美形は困る、と心の中だけで悪態をついた。

「椿はこちらに来て不幸だったの？僕と出会えたことは椿にとっては何でもないこと？」

「い、いや……。そういうことじゃなくてさ……」

「そういうことじゃなくて？」

スローレットはしどろもどろな椿を、まだ追い込む。

椿が更にオドオドすることをよく知っているからする行動なのだ。しかしそうとは知らない椿は、案の定更にオドオドする。

「こ、こっちでのあたしの役目っていうか……、ねえ」

言葉を何とかして濁そうとする椿に笑いそうになるが、なんとかこらえてスローレットは首を小さく傾けた。  
ここで吹き出すのはまだ早い。

「じゃあ、僕と会ったことは？」

「えっと……。不幸中の幸い、かな？」

「不幸中の幸い？」

「むっさい男集団の中の美青年を見つけた感覚みたいな、銀杏だらけのところに消臭力見つけた感覚みたいな。そんなかんじ」

椿が言ってることの半分も理解できなかったスローレットだが、その一生懸命な説明にいいよ笑みが零れ始めた。  
フォーローされていたのだろうことは薄々理解もできたし。

「かわいいね、椿は」  
「は？」

突然ケロツとした物言いをしたスローレットに対し、椿はすっとんきょうな声を上げた。  
そこでやっとスローレットが芝居をしていたことに気付いた。  
慌てた分怒りも大きい。

「スロー、あんたねえ！人をからかうのも大概にきなさいよね！」  
「だって椿がかわいいんだもん。仕方ないでしょ？」「かわっ……！」

スローレットの口から何度となく椿に向けられる単語であるが、やはり慣れることはない。

一発叩けばおとなしくなるのでは？という少々荒々しい考えも浮かびはするが、こんな美形を叩けるほどの度胸が椿にはなかった。  
けっきょくは深いため息をして、諦めるしか道はないのだった。

「もう……。仕方ないってなに……。訳わかんない」  
「椿様、こちらのドレスをご試着願えますか？」

ヒスからの言葉と共に渡されたのは、何がどうなったのか純白のドレスであった。

もはや椿に突っ込む余裕すらない。

隣では「椿に似合いそうだね」と意気揚々としたようなスローレックスの音がするが、こちらも放っておいた。

自分を放っておいてくれないのは、何もエルザイヌだけではない。その弟もその侍女たちも同じなのだ。

「あたしに安息の地なんかないんだ……」

誰も自分を放っておかないということは、今までないことで疲れはする。

しかし同時に胸の辺りが暖かいのも事実だ。

嬉しいのかもしれない。

自分はこれを望んでいたのかもしれない。

椿の中では確実に変化が起きていた。

「あー、ダッチェスだけどお！入っていいか？」

扉の向こうの声の主もまた、椿を放っておかない一人である。

（ああ、でもやっぱ、疲れるんですけど……）

ため息は椿の口から自然と出た。

## パーティー 1 (後書き)

遅い投稿誠に申し訳ありませんでした。

もうグダグダですね。

これからの展開に期待します。

椿ちゃんたちががんばれー！

最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7682j/>

---

新月のご招待

2011年8月23日21時16分発行